



丸山千枚田 稲刈り
2010/9/5

東から西から、紀南へ集う研修医たち。

紀南病院で一体何人の人と出会っただろう。紀南病院でいつも働いている人にとってみれば、また研修医が来た、と思うだけかもしれない。けれど、研修医側からすると、研修医の時期が終われば、いずれどこかの病院の常勤になり、外来を持ち、責任が重くのしかかる時期が来る。一定期間、紀南病院で働く、ということは、一生忘れられない出来事になるのだ。例えば、初めてスナックに入りそこでT先生がカラオケで「掃除おぼちゃん」という強烈な歌を歌ったこと、忘れぬ。院長と、太陽のような中秋の名月の下を歩いたこと、忘れぬ。奥野先生が語気を強めて地域医療について語ったこと、忘れぬ。赤木さんをはじめとする救急担当の看護師さんと、他愛もない会話をしたあの夏の日、忘れぬ。将来の自分が思い描けなくて、夕日を見に阿田和ハワイに行って、ただ波を眺めたことも、いつか懐かしい思い出になるだろう。思い出に浸っていたらそろそろ字数制限に引っかかってくる。紀南病院での出会いを糧に明日からまたがんばろう。(鶴田葵)



『紀南の皆さん、行ってきます』の言葉を残して、また伊勢に戻りたいと思います。なぜこの言葉を口にしたかというと、「ありがとうございました」や「さようなら」では、もうこれで終わってしまうような印象があるからです。プロフィールにも書きましたが、大学6年生の時に小笠原へ離島医療を体験しに行きました。船で島に到着すると島民の方が初めて訪れた僕に、『お帰りなさい』という言葉をかけてくれました。そして帰る際には、『行ってらっしゃい』と言ってくれました。数え切れないほど素晴らしい体験をしましたが、これらの言葉が最も印象に残っており、嬉しかったです。短い間でしたが、今回の研修でもたくさんの思い出ができました。文章では表せないと思い、紀南の皆さんに『行ってきます』と伝えて、また明日から精進していきたいです。また、戻ってきたときに『お帰りなさい』と言って頂けると嬉しいです。(倉井峰弘)



研修期間3か月は歴代研修医の最長タイである
ようです。皆様方のあたたかみご支援のおかげでこ

まで来ることができました。あ特に9月の産婦人科研修では、外科、産婦人科学の先生方、スタッフの皆様に変な良くしていただき、とりわけ充実した研修をすることができました。関係者の方々に重ねて御礼申し上げます。今後は関東を中心に活動する予定ですが、年中みかんのとれる町、御浜町を忘れることはないと思います。最後に、紀南病院の今後のますますのご発展をお祈り申し上げます。(澤本尚哉)



1ヶ月という短い期間とはいえ、紀南病院を去るのは物悲しいものがあります。お世話になった皆様、この場を借りて御礼申し上げます。さて話は変わりますが、一緒に研修していた鶴田先生は紀南病院に来るために新車を調達しました。いわゆるエコカー補助金駆け込み組というやつです。納車当日に全国の運転荒いランキングNo.1の「なごわ」ナンバーひしめく堺から紀南病院に向けて移動を開始、彼女は尾鷲の山々を通過して紀南病院に到着しました。ところが同乗してビックリ！彼女こそ「なごわ」だったのです。まさにルールは壊すためにあると言わんばかりの存在感。急ブレーキ、急発進は当たり前。不器用な生き方しか出来ない彼女は社会のルールに真っ向から対立して、時には赤信号すら加速をつけて通過してしまいました。「こんな誰かが決めた枠の中に押し込められるなんて、もう我慢出来ない」と道路の分離帯を超えて真ん中に吸い込まれていきました。そんな鶴田先生のドライビングテクニックに酔いしれた人たちは口々にこう言いました。「あっ、危ない！」しかし彼女はみんなの杞憂など素知らぬ顔、彼女の背中は語っていました。「決められたルールの上を走るだけの人生なんてもう終わりにしたい…。」そんな彼女も阿田和の道で経験値を上げ、やっと仮免卒業レベルまでレベルアップしました。ついに彼女は天に召され…。いや無事に堺に帰ることが出来たそうです。そんな彼女は今日もこの広い日本の公道のどこかで愛車を走らせているのでしょう。阿田和の皆さん、暴走する赤のデモコはくれぐれもご注意ください。



(住吉壮介)

無関心というものは、最も怖い病気である——と、三重苦の闇を乗り越えた彼の人は言った。便利さ故にやや希薄なものがちな都市部でその病は流行り易い。事実わたしはアパートの隣部屋の住民の名を忘れてしまっている。しかしこの2か月紀南での生活はそんな病など蔓延する際なかった。救急外来に来る方が、どんな場所でも誰とどんな暮らしをしているのかを聞くのは仕事として関心を持って聞くのは当たり前だが、付き添いの方が両親でもなんでもなく、近所の人であったりするのには珍しくない。この人達が優しく暖かいのは他人に関心を持ち、自分の事であるかのように受け入れるから。不便な場所でも、高齢者ばかりでも、皆集まれば何だって出来る。



しかし住民だけでは何とも解決できないのが医師不足の現状。事実にはニュースより奇なり。希望の光となる奇跡の“水”を見つけるにはどうしたらいいのか。自分の答えは出ぬまま未だ闇を彷徨っている。
(若宮里恵/編集長)



- 倉井 峰弘 (山田赤十字病院)
- 澤本 尚哉 (東京大学医学部附属病院)
- 住吉 壮介 (聖路加国際病院)
- 鶴田 葵 (市立堺病院)
- 若宮 里恵 (三重大学医学部附属病院)